

437 甲状腺の腫瘍・炎症性疾患における標識リンパ球シンチグラフィの使用経験

久山順平、内田佳孝、太田正志、伊東久夫（千葉大 放）
齊藤正好（千葉大 放技校）

超音波検査によって評価された甲状腺疾患における病巣へのリンパ球浸潤の所見と体内リンパ球循環の関係を評価するため炎症性疾患5例と腫瘍性疾患4例に、末梢血リンパ球のIn-111標識シンチグラフィを施行した。リンパ球の収集には成分採血器用い、平均 1.4×10^9 個のリンパ球を12.5MBqのIn-111で標識後、静注し、24時間イメージを基本に集積の有無を評価した。亜急性甲状腺炎、橋本病では末梢血リンパ球プールから炎症巣への盛んな遊走が証明され、病勢のリアルタイムの把握が可能となった。腫瘍疾患においても浸潤細胞の種類まで示唆する所見が示されるなど、病理像に対応した結果が示され、高い臨床的有効性が得られた。

438 甲状腺癌潜在性肺転移に対する放射性ヨード治療

御前 隆、岩田政広、笠木寛治、小西淳二（京大核）

甲状腺癌の肺転移のうちX線写真は正常で、放射性ヨード(RAI)によるシンチグラムで発見されたものにつき、RAI治療の効果を検討した。過去15年間に該当者は9人あり、年齢は平均30.1才、男性2名女性7名。治療は1-4回行なわれていた。抗サイログロブリン（以下Tg）抗体陽性の3例は治療後にRAI集積がみられなくなり、ほぼCRと判定した。抗Tg抗体陰性の6例中、4例はTgが測定感度以下となりRAI集積も陰性化した（CR）が、2例は治療時のRAI集積が弱くTgの下降が不十分であった（PR）。初回RAI治療から1-7年経過し死亡例はなく、治療を行なえば潜在性肺転移の生命予後は良好と思われた。甲状腺を全摘した分化癌症例には一度はRAIによるシンチグラムないし治療を行なうべきではないかと考えられる。集積が弱くPRに留まる例の治療をどうするかは今後の課題である。

439 甲状腺全摘術後分化癌の転移検出における¹³¹IシンチグラフィとTg測定の臨床的有用性

桑田 知、熊野玲子、永松 仁、百瀬 満、小林秀樹、
金谷和子、牧 正子、日下部きよ子（東女医大 放）

3年以上経過観察されている分化型甲状腺癌全摘術後の162例についてretrospectiveに¹³¹IシンチグラフィとTSH刺激下のTg値、転移部位の評価を行った。転移巣への¹³¹Iの集積が見られたのは51例で、部位は骨10例、肺24例、LN17例であった。Tg値は¹³¹I集積がなかった群と比較し高値であった。¹³¹I集積が見られずTg高値を示したのは48例で、部位は骨6例、肺30例、LN12例であった。肺転移の8例、LN転移の2例は¹³¹I集積がなく、Tg値も5ng/ml以下であった。¹³¹I集積がなく、Tg値5以下で、他検査でも転移が検出されない症例は54例であった。¹³¹I治療を目的とした甲状腺全摘術の適応決定には、Tg値、転移部位、年齢を考慮に入れて慎重に行う必要があることが示唆された。